

22年センター試験平均点は、

文・理系型とも2年連続の大幅ダウン！

5(6)教科7科目平均点(900満点/加重平均)；

文系型 513.1点(-14.8点) / 理系型 509.1点(-22.0点)

基幹科目の国語、数学Ⅰ・Aがダウン、英語、数学Ⅱ・Bはアップ。
新型インフル等による「追試験」受験者は893人。

旺文社 教育情報センター 22年2月

22年センター試験は志願者55万3,368人(前年比1.7%増)、受験者52万600人(同2.6%増)で、ともに2年連続の増加。今回は新型インフルエンザの感染拡大に備え、「追試験」実施日の延期や会場設置の拡充などの特例措置が講じられ、混乱なく無事に終了した。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、国公立大センター試験の文系及び理系の標準型<5(6)教科7科目；900点満点>の加重平均点を旺文社で算出した結果、文系型513.1点、理系型509.1点で、ともに2年連続の大幅ダウンとなった。

過去のデータも含め、センター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

■文系型・理系型の「5(6)教科7科目」平均点

◎ 国公立大のセンター試験(以下、セ試)科目は、国立大を中心に5(6)教科7科目(900点満点)が主体となっている。標準的な受験科目の編成としては、次の2タイプである。

文系標準型(900点満点)＝国語＋地歴＋公民＋数学2科目＋理科1科目＋外国語

理系標準型(900点満点)＝国語＋地歴・公民から1科目＋数学2科目＋理科2科目＋外国語

このため、各科目の平均点と受験者数から割り出す全体の平均点(加重平均)も、文系型と理系型とに分けて算出。英語は「筆記＋リスニングテスト」の得点率を基に200点満点に換算。

● 文系標準型平均点＝513.1点(前年より14.8点ダウン)

● 理系標準型平均点＝509.1点(同、22.0点ダウン)

◎ 平均点がダウンした主な科目は、国語(対前年差。以下、同。-7.8点)、数学Ⅰ・A(-15.0点)の基幹科目のほか、物理Ⅰ(-9.5点)、化学Ⅰ(-15.8点)、及び公民の各科目。

一方、平均点がアップした主な科目は、英語(+6.8点；筆記+3.1点、リスニングテスト<以下、リスニング>+5.4点)のほか、数学Ⅱ・B(+6.3点)、生物Ⅰ(+13.9点)、地学Ⅰ(+14.9点)、日本史B(+3.6点)などである。

◎ 特別措置：新型インフルエンザの感染拡大に備え、治療や万全な試験実施の準備等を考慮し、追試験の実施時期を従来の本試験の1週間後から2週間後に遅らせ、試験会場も全都道府県の48会場(これまでは2会場)で確保するなどの特例措置が講じられた。

「追試験」受験許可者は972人(うち、新型・季節性インフルエンザ罹患者384人)で、受験者は893人(追試験のみ453人、本試験＋追試験440人)だった。

●平成22年度大学入試センター試験平均点等一覧(本試験・確定)

＜平成22年2月5日 大学入試センター発表資料より＞

教科名	科目名	平成22年(確定)		平成21年(確定)		平均点の 対前年差	受験生数の 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
文系標準型平均点(900点満点)		—	513.1	—	527.9	▲ 14.8	—	
理系標準型平均点(900点満点)		—	509.1	—	531.2	▲ 22.0	—	
国語(200点)	国語	497,431	107.6	484,871	115.5	▲ 7.8	12,560	
地理歴史 (100点)	世界史A	1,979	52.3	2,187	44.2	8.1	▲ 208	
	世界史B	91,118	59.6	94,106	62.7	▲ 3.1	▲ 2,988	
	日本史A	4,094	48.4	4,365	46.5	1.9	▲ 271	
	日本史B	151,792	61.5	144,327	57.9	3.6	7,465	
	地理A	4,980	53.6	5,501	54.7	▲ 1.1	▲ 521	
	地理B	110,093	65.1	109,616	64.5	0.7	477	
公民 (100点)	現代社会	171,419	58.8	169,711	60.2	▲ 1.4	1,708	
	倫理	55,849	68.7	53,116	71.5	▲ 2.9	2,733	
	政治・経済	89,887	59.2	82,804	69.3	▲ 10.2	7,083	
数 学	数学① (100点)	数学Ⅰ	9,555	40.9	9,209	49.3	▲ 8.5	346
		数学Ⅰ・A	368,289	49.0	354,609	64.0	▲ 15.0	13,680
	数学② (100点)	数学Ⅱ	7,018	35.9	7,503	28.4	7.6	▲ 485
		数学Ⅱ・B	331,215	57.1	319,045	50.9	6.3	12,170
		工業数理基礎	67	48.5	67	33.5	15.0	0
		簿記・会計	1,367	40.8	1,348	50.1	▲ 9.3	19
		情報関係基礎	606	59.9	660	61.0	▲ 1.1	▲ 54
理 科	理科① (100点)	理科総合B	16,372	64.8	17,175	58.4	6.5	▲ 803
		生物Ⅰ	184,632	69.7	176,043	55.9	13.9	8,589
	理科② (100点)	理科総合A	29,315	63.4	30,427	56.6	6.8	▲ 1,112
		化学Ⅰ	208,168	53.8	200,411	69.5	▲ 15.8	7,757
	理科③ (100点)	物理Ⅰ	147,319	54.0	143,646	63.6	▲ 9.5	3,673
		地学Ⅰ	24,406	66.8	25,921	51.9	14.9	▲ 1,515
外国語 (200点)	英語	筆記(200点)	512,451	118.1	500,297	115.0	3.1	12,154
		リスニング(50点)	506,898	29.4	494,342	24.0	5.4	12,556
		筆記+リス(200点)	—	118.0	—	111.3	6.8	—
	ドイツ語	124	150.1	106	153.5	▲ 3.4	18	
	フランス語	165	134.8	149	139.0	▲ 4.2	16	
	中国語	364	138.0	409	137.6	0.5	▲ 45	
	韓国語	167	150.0	136	167.8	▲ 17.8	31	

- ＜注＞① 文系標準型平均点(900点満点)は、国語(200点)、地歴と公民2科目受験(200点)、数学①と数学②の2科目受験(200点)、理科①、②、③合わせて集計100点)、外国語(200点；英語は筆記<200点>＋リスニング<50点>の得点率を基に200点満点に換算)の加重平均点。
- ② 理系標準型平均点(900点満点)は、上記文系型の地歴と公民を合わせ(1教科として集計100点)、理科を2科目(2科目受験組及び3科目受験組における平均点の高得点2科目から算出した200点)とする5教科7科目の加重平均点。
- ③ 文系・理系とも、大学入試センター発表の科目別平均点(小数第2位まで)と受験者数をもとに旺文社が算出(小数第1位まで)。
- ④ 表中の「平均点の対前年差」は、四捨五入の関係で「22年－21年」と一致しない場合もある。
- ⑤ 5教科6科目(文系・理系共通)の800点満点を900点満点(換算)の加重平均点は508.8点で、21年より15.0点のダウン。
- ⑥ 得点調整は、対象科目間の平均点差の最大が「生物Ⅰ－化学Ⅰ」＝15.9点で、20点差以内に収まり、実施されなかった。
- ⑦ 表中の▲印は、対前年差のダウンまたは減少を示す。

受験生の実態を推測

上表に掲げた文系型、理系型の平均点は、私立大型を含む全受験者の加重平均を集計したものである。実際の国公立大文系及び理系志望者の平均点(ともに5(6)教科7科目900点満点)は、上記の数値より文系、理系とも数十点程度高いとみられる。

また、実際の理系志望者は、平均点が大きくダウンした物理Ⅰ、化学Ⅰに加え、理系志望者の受験が多い公民が全科目ダウンしたことから、文系志望者に比べて大幅にダウンしたことが推測される。

一方、文系志望者の受験が多い生物Ⅰと地学Ⅰが大幅な平均点アップとなっていることから、文系志望者の平均点は理系志望者に比べ、低下幅は小さかったとみられる。

■5教科6科目(文・理系型共通)平均点の推移

◎ 過去の文・理系型共通の5教科6科目(国語、地歴・公民から1科目、数学2科目、理科1科目、外国語)の平均点(加重平均点、800点満点)と比較するため、22年の「5教科6科目」平均点(900点満点に換算。以下、同)を算出した。結果は21年より15.0点ダウンの508.8点(得点率56.5%)となり、過去最低を記録した(下図参照)。

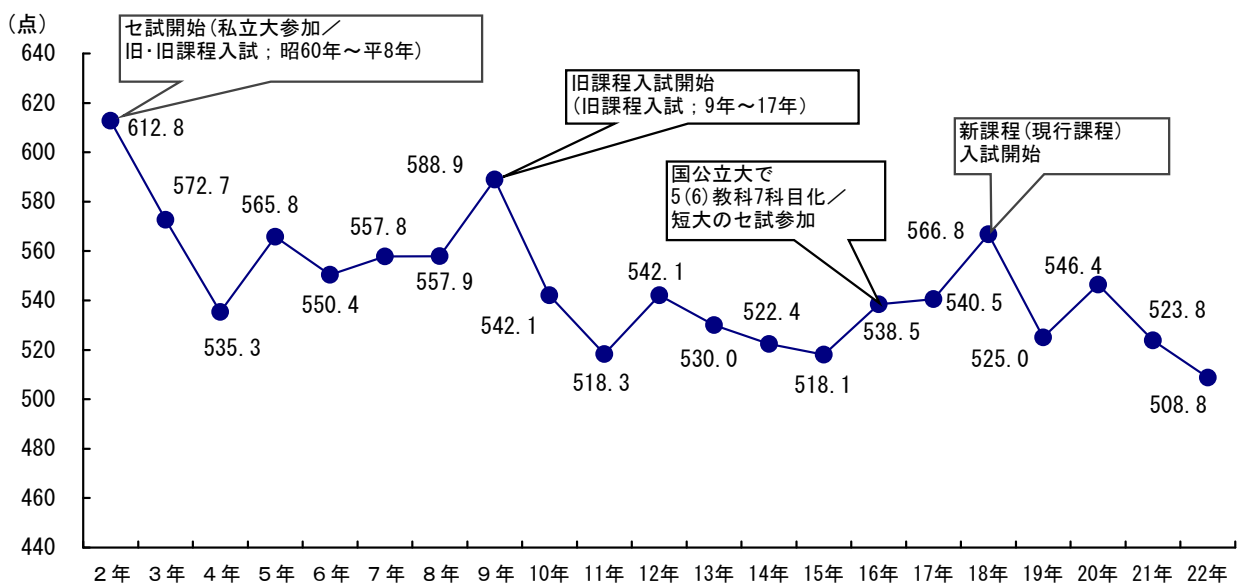
◎ 2年はセ試開始の年で、平均点612.8点(得点率68.1%)はこれまでの最高である。9年は旧課程入試の始まった年で、平均点は8年より31.0点アップした。10・11年とも、国語I・II、数学I・A、英語などのダウンで、特に11年の平均点は518.3点まで低下。16年は国立大を中心に5(6)教科7科目が本格化し、国語I・II、数学I・Aなど、基幹3科目のアップが全体の平均点を大きく押し上げた

新課程(現行課程)入試初年度の18年は、英語、国語、数学II・Bなどのアップで前年より26.3点アップの566.8点の高得点となった。19年は国語、数学I・A、数学II・Bをはじめ、一部の文系科目を除き軒並みダウンし、前年より41.8点の大幅なダウン。20年は英語の平均点が筆記、リスニングともダウンしたものの、数学I・A、国語、現代社会、地理B、化学I、数学II・Bなどのアップで、前年より21.4点の大幅アップ。21年は英語(筆記、リスニングとも)、国語、数学I・Aなどの基幹科目の平均点ダウンで、再び前年より22.6点の大幅ダウンとなった。

◎ 22年は英語(筆記、リスニングとも)、数学II・Bはアップしたものの、国語、数学I・Aの基幹科目のほか、公民の各科目に加え、物理Iと化学Iが大幅にダウンしたことなどから、2年連続の大幅ダウン(-15.0点)となった。平均点508.8点(得点率56.5%)は、過去最低。

◎ 入試制度改革、及び教育課程改編に伴う出題科目や内容等の変更時のセ試は、平均点アップの傾向がみられる。最近では、18年の新課程入試時のアップ以降、20年を除き、低下傾向を示している。

●センター試験(本試)5教科6科目加重平均点(文・理系型共通;900点満点に換算)の推移



注) 大学入試センター発表の科目別平均点と受験者数から、5教科6科目(地歴・公民合わせて100点、理科1科目として100点<文・理系型共通>の800点満点)の加重平均点を旺文社が算出。16年からの5(6)教科7科目(900点満点)に合わせ、900点満点に換算。18年は「経過措置」科目のデータを除外してある。

■英語;筆記+3.1点、リスニング+5.4点で、「筆記+リスニング」は6.8点アップ

◎ 前年 10.3 点(200 点満点)の大幅ダウンとなった 22 年の筆記は、第 5 問のイラスト問題が新形式になってやや難化したものの、第 1 問(発音・アクセント)から文強勢問題がなくなったり、総語数が減少したりしたことなどから、全体としては易化し、平均点は 3.1 点アップの 118.1 点(得点率 59.1%)となった。

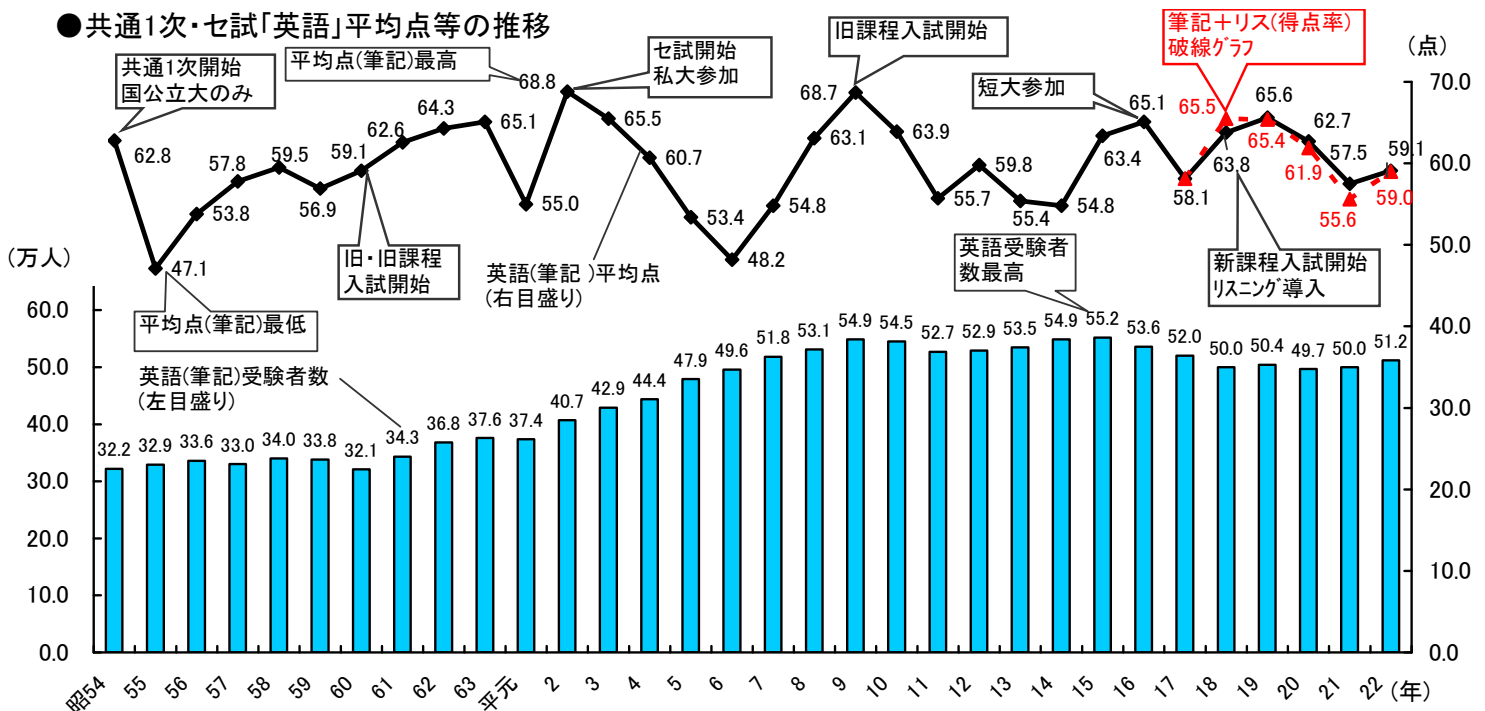
一方、リスニングは、18 年の導入時に平均点 36.3 点(50 点満点、得点率 72.6%)の高得点を示した後、19 年 32.5 点(同 65.0%)→20 年 29.5 点(同 59.0%)→21 年 24.0 点(同 48.0%)と、3 年連続ダウンしていたが、22 年は 29.4 点(同 58.8%)で上昇に転じた。

また、「筆記+リスニング」の得点率(旺文社算出)も、18 年 65.5%→19 年 65.4%→20 年 61.9%→21 年 55.6%とダウンしていたが、22 年の得点率は 59.0%にアップし、得点は 118.0 点(200 点満点換算)で、21 年より 6.8 点上回った。

◎ 今回で 5 回目となるリスニングは、IC プレーヤーの形状を従来の縦長(長方形)から正方形に変えたり、「電源」「確認」「再生」の各押しボタンの位置を変更したり、様々な改良が施された。しかし、IC プレーヤーの不具合などから全国で 220 人(前年は 249 人)が、リスニング終了後(第 1 日目)に別の機器で「再開テスト」を受けた。「再試験」対象者は 1 人であったが、受験しなかった。

なお、今回から IC プレーヤーや音声メモリーは試験終了後に回収された。

◎ ところで、英語(筆記:22 年受験者約 51 万 2,000 人)は例年、ほぼ全てのセ試受験者が受験するため、その平均点のアップ、ダウンは文・理系型共通の 5 教科 6 科目の加重平均点のアップ、ダウンと重なる部分が少ない(下図と P.3 のグラフを比較参照)。



注. ① 各年とも、「筆記」(200 点満点を 100 点満点に換算)の平均点を実線で、受験者数を棒グラフで表示。

② 18 年~22 年は「筆記+リスニング」の得点率(18 年 65.5%、19 年 65.4%、20 年 61.9%、21 年 55.6%、22 年 59.0%)を破線で表示。

■国語;2年連続の平均点ダウンで、得点率は“5割台前半”に低下

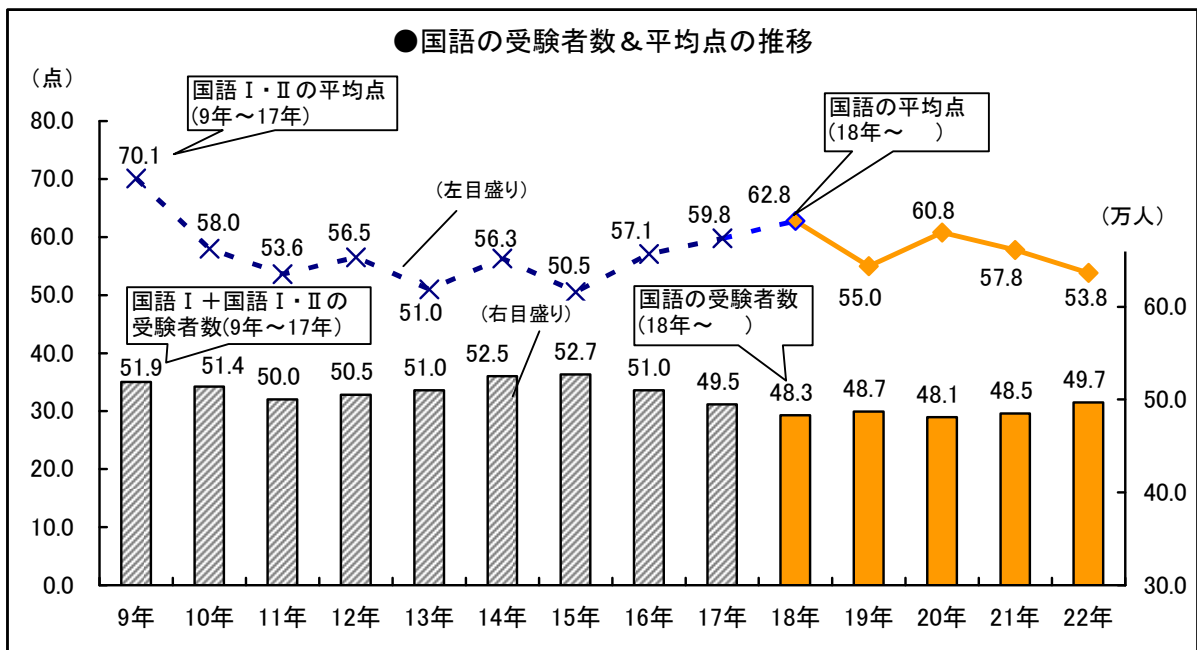
◎ 英語に次いで受験者の多い国語(22年受験者約49万7,000人)について、前回の旧課程入試の始まった9年から22年までの平均点と受験者数の推移を下図に示した。

◎ 9年の国語Ⅰ・Ⅱ(9年～17年までの旧課程時の国語の出題は、国語Ⅰと国語Ⅰ・Ⅱの2科目。受験者数は圧倒的に国語Ⅰ<国語Ⅰ・Ⅱ)の平均点は70.1点(200点満点を100点満点に換算。以下、同)と高得点であったが、翌10年には58.0点と大幅にダウンしている。

その後は旧課程入試最終の17年まで、50点台のアップ・ダウンを繰り返してきた。15年に50.5点の最低点を記録した後、3年連続上昇し、新課程(現行課程)入試開始の18年には62.8点で9年に次ぐ高得点となった。

しかし、19年は大幅にダウンし、再び50点台半ばまで急落。20年は平均点が大幅にアップし、得点率も2年ぶりに6割台に戻った。21年は再び平均点ダウンとなって得点率も5割台後半となり、文系型、理系型それぞれの加重平均点を引き下げる要因の一つとなった。

◎ 22年は、古文・漢文が難化し、全体として平均点ダウンにつながった模様で、得点率は5割台前半まで低下した。国公立大ではほとんどが古文・漢文を必答としており、特に国公立大理系志望者にとっては、厳しかったとみられる。



注1. 旧課程入試(9年～17年)は、国語Ⅰ及び国語Ⅰ・Ⅱの2科目出題。新課程(現行課程)入試(18年～)では、国語1科目のみの出題。

2. 200点満点を100点満点に換算。

■**数学**; 数学Ⅰ・Aは-15.0点で、初の40点台。 数学Ⅱ・Bは+6.3点の57.1点。
 数学Ⅱ・Bは過去21回で平均点40点台が5回、平均点の変動幅も大。

◎ 数学は国立大志願者にとって、文系志望者も含め必須教科だ。中でも数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bは英語、国語に次いで30万人超の受験者を擁し、文・理系型の基幹科目である。

セ試開始(2年)以降、22年までの21回に及ぶ数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰを含む。以下、同)の前回までの最低点は11年の50.7点(旧・数学Ⅰの最低点も3年の50.7点)であったが、今回49.0点までダウンし、セ試開始以降初めて5割を割った。これまでの最高点は12年の73.7点で、最高点と最低点との較差は24.7点。

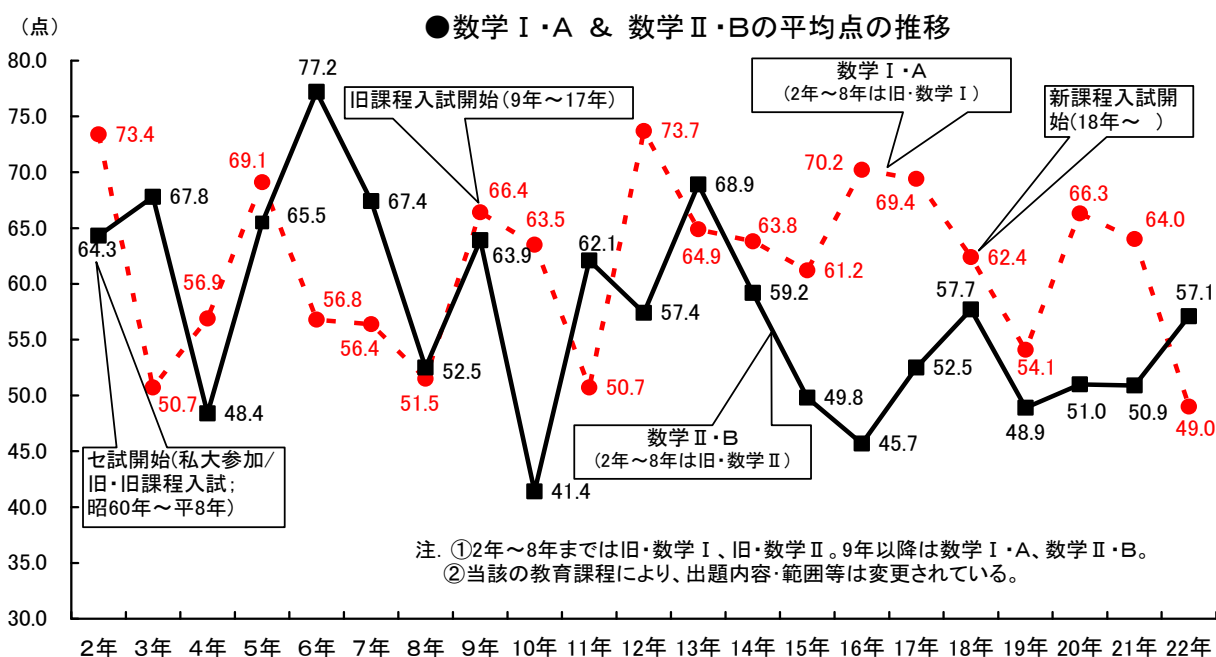
◎ 一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点は10年の41.4点、最高点は6年の77.2点で、その較差は35.8点。

◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は22年も含め、過去21回の試験(本試)で50点未満が5回もあって変動幅も大きいのに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点未満は22年の1回のみである。

◎ 数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示しているとみられる。

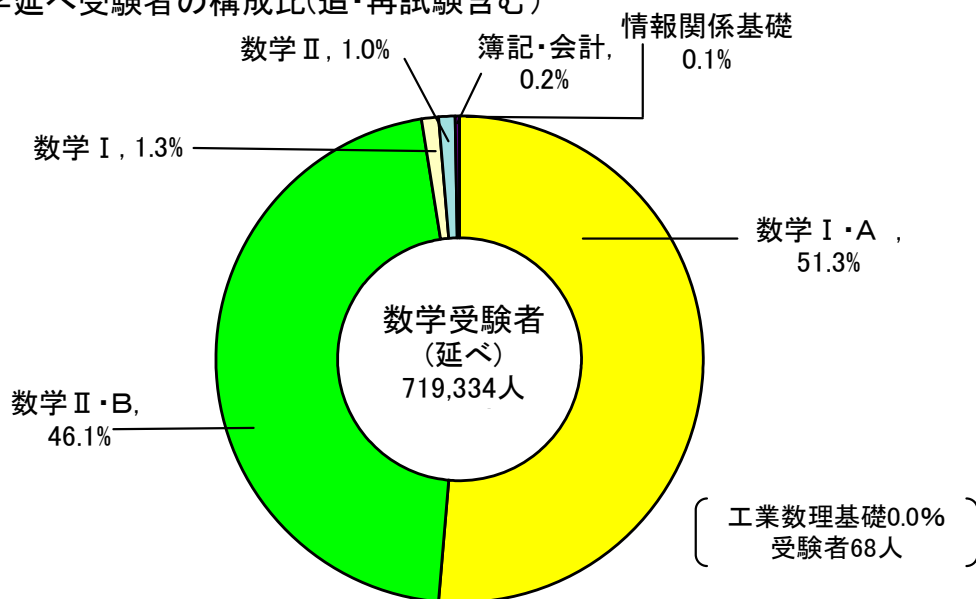
◎ 19年は数学Ⅰ・A、数学Ⅱ・Bとも大幅な平均点ダウンで、“数学ショック”を招いた。20年の数学Ⅰ・Aは、平均点が大幅にアップ。21年の数学Ⅰ・Aは2.3点の平均点ダウンとなったが、数学Ⅱ・Bの平均点はほぼ前年並みであった。

◎ 22年は、数学Ⅰ・Aの大幅ダウン(-15.0点)に対し、数学Ⅱ・Bがアップ(+6.3点)。数学Ⅰ・Aは第3問を除いて標準的な出題であったが、思考力を要する出題が多くて難化した。特に第3問は、幅広い幾何に対する理解が求められ、かなり難しかった模様。国立大教員養成系などの文系志望者にとっては大きな痛手であったろう。

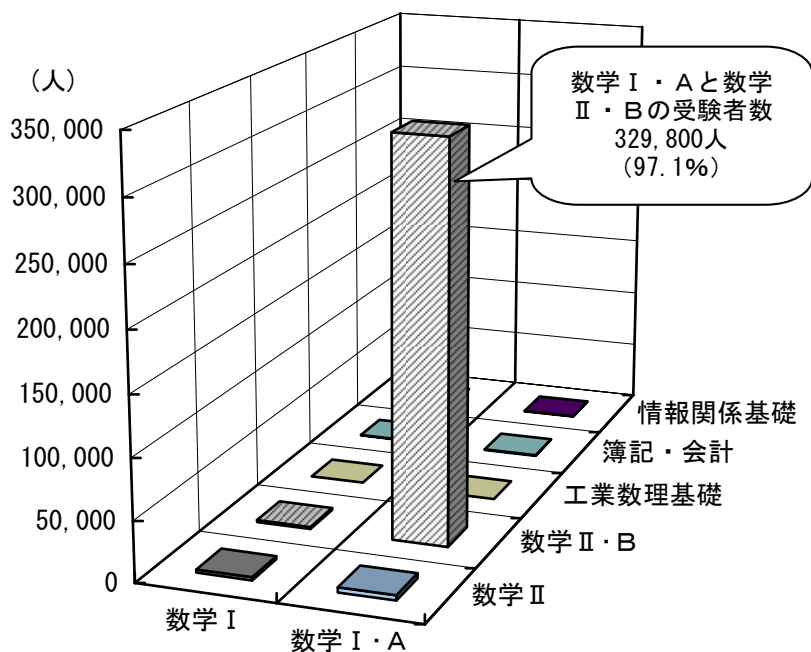


□数学2科目受験は、数学I・Aと数学II・Bで32万9,800人(2科目受験者の97.1%)

●数学延べ受験者の構成比(追・再試験含む)



●数学2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



(人)

	数学II	数学II・B	工業数理基礎	簿記・会計	情報関係基礎
数学I	2,624	1,684	14	280	76
数学I・A	4,321	329,800	53	465	402

■公民;現社が受験者増に転じ、公民受験者4年ぶりの増加。平均点は軒並みダウン

◎ 国公立大の5教科6科目(地歴と公民から1科目)が主流であった時代は所謂“公民保険”として、「地歴・公民ダブル受験」の傾向が見られた。

しかし、16年から本格化した国公立大文系の6教科7科目により、公民は文系標準型の“必須科目”となった。そのため、16年の公民受験者は、史上最多の約33万人を記録した。

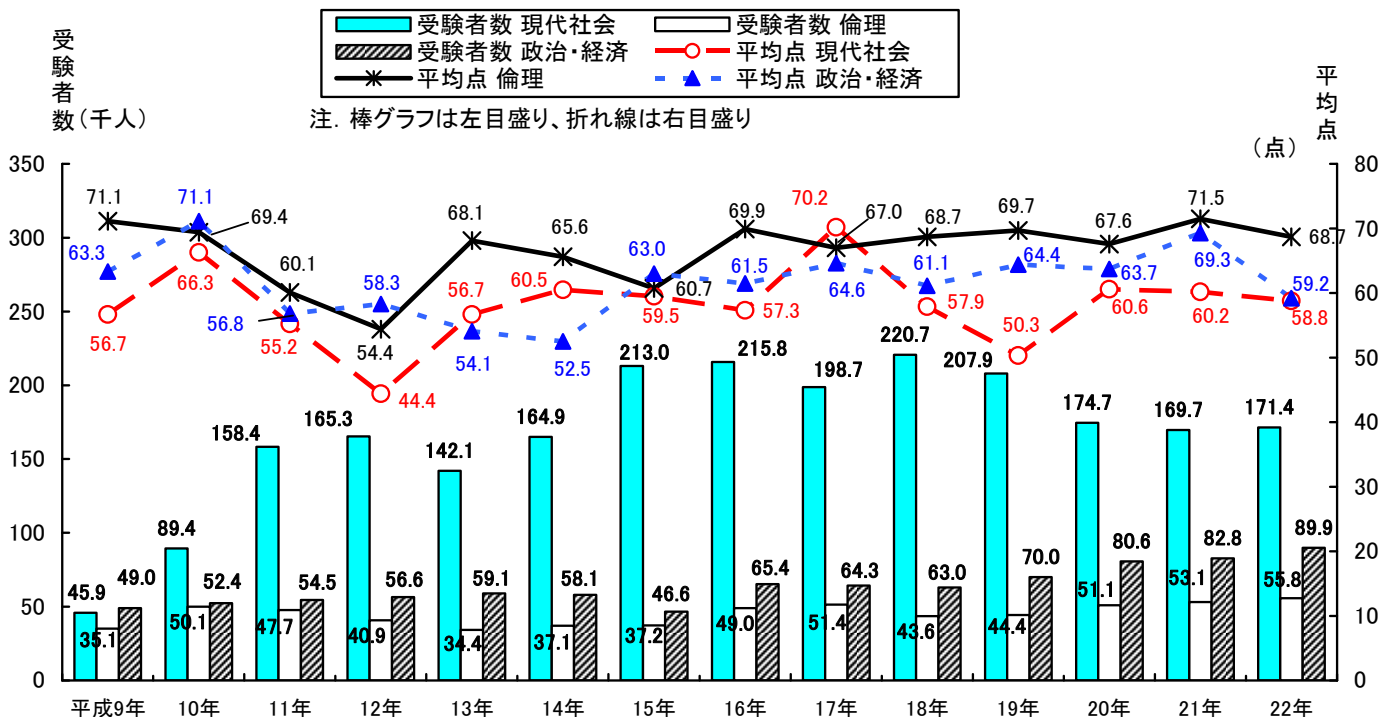
◎ 新課程(現行課程)入試となった18年から、公民の時間割はそれまでの2日目最終枠から第1日目の1時間目に移り、初日が文系科目でまとまった。18年はこうした時間割の変更に加え、前年の現代社会の高得点などから、軒並み受験者減となった教科の中で唯一、公民受験者は約1万3,000人(4.1%)増えた。

19年以降、21年まで公民受験者の減少が続いた。公民受験の半数以上を占める現代社会の平均点の大幅ダウン(17年70.2点→18年57.9点→19年50.3点)や低迷(18年以降、公民3科目中で平均点最低)により、現代社会が主に国公立大理系志望者に敬遠されたことなどが公民受験者減につながったとみられる。

◎ これまで比較的平均点の高かった倫理や政治・経済は19年以降、ともに受験者増となっていたが、22年はこの2科目に加え現代社会も4年ぶりの受験者増となり、公民全体としても4年ぶりの増加となった。ただ、平均点は政治・経済(59.2点)の-10.2点を筆頭に、倫理(68.7点)-2.9点、現代社会(58.8点)-1.4点と、各科目ともダウンした。

◎ 下のグラフを見ると、公民各科目の受験者数の増・減は、当該科目の前年平均点のアップ・ダウンや平均点の高・低などに影響されている様子がうかがえる。

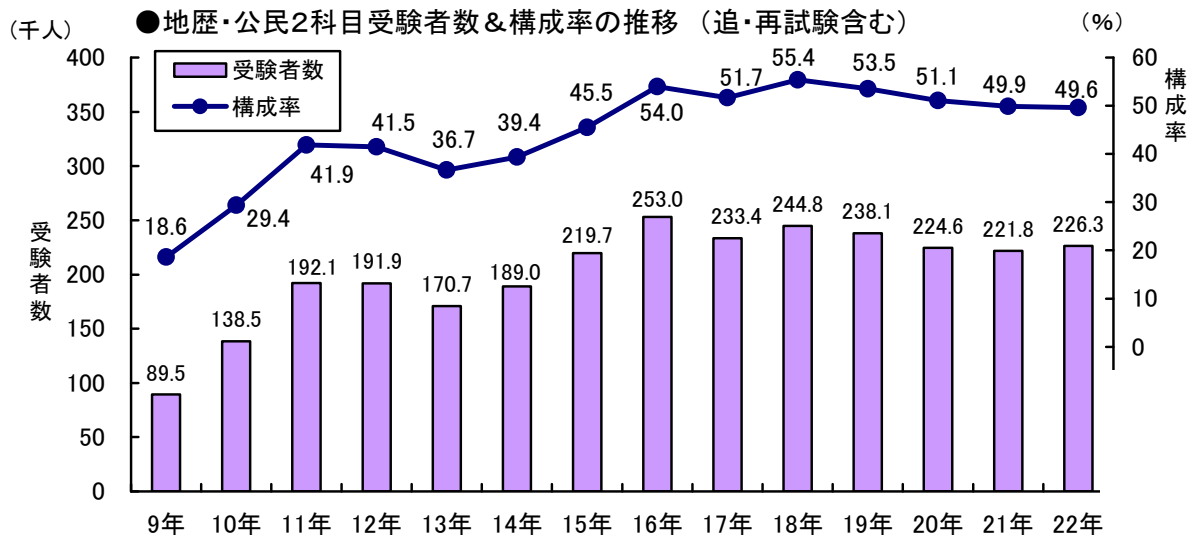
●公民[現社・倫理・政経]の受験者数&平均点の推移(本試験)



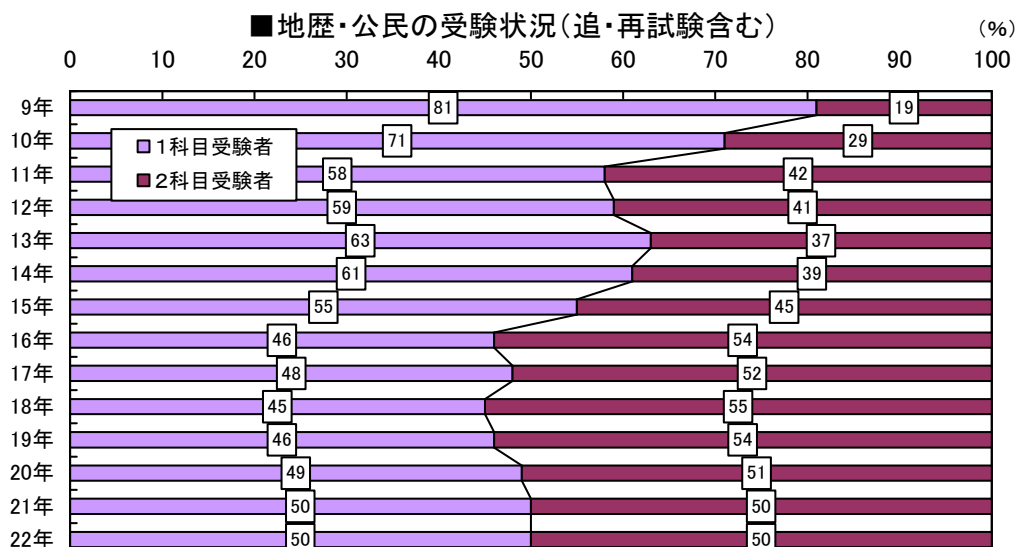
- 11年までは現社の受験者数が毎年倍増。しかし、平均点は下降傾向で、12年は現社と倫理で史上最低となった。
- 16年から公民は文系標準型の“必須科目”となり、16年の公民受験者は33万人超の史上最多となった。
- 19~21年は、現社のそれぞれ前年平均点ダウンや低得点から受験者が減り、公民全体の受験者減にもつながった。
- 22年は政経と倫理の受験者増に加え、現社も4年ぶりの受験者増となり、公民全体としても4年ぶりに受験者が増えた。

■地歴・公民;2科目受験者、4年ぶりに増加。構成率は4年連続ダウンの49.6%

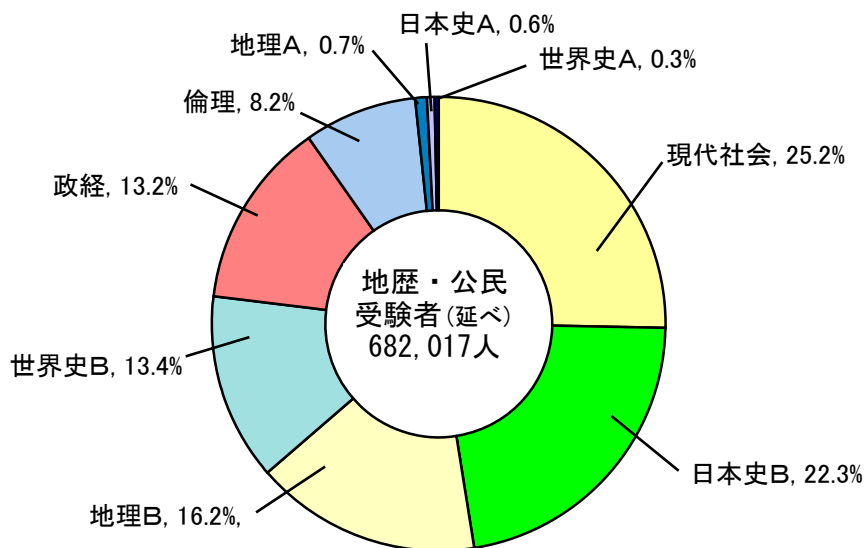
- ◎ 地歴・公民2科目受験は前述のように、「5教科6科目」(地歴・公民から1科目)時代においては、高得点を期待する“公民保険”による傾向が強く、11年までは2科目受験者数(実受験者数)が激増した。16年は5(6)教科7科目化で、国立大の文系を中心に地歴・公民2科目必須となったため、2科目受験者は一気に増え、約25万3,000人の過去最多を記録。地歴・公民受験者に占める2科目受験者の割合(構成率)も初めて50%超となった。
- ◎ 新課程入試となった18年は、時間割の変更などで2科目受験者は前年より約1万1,000人(4.9%)増の約24万4,800人で、地歴・公民受験者に占める割合も過去最高の55.4%。
- ◎ 19~21年は前述のように、理系志望者を中心に“公民保険”の意味合いが薄れ、2科目受験組が減少。22年は地歴が約4,000人(1.2%)、公民が約1万1,800人(3.9%)受験者を増やしたことなどから、地歴・公民2科目受験者も約4,500人(2.0%)増の約22万6,300人となり、4年ぶりに増加した。しかし、2科目受験の構成率は4年連続ダウンの49.6%だった。



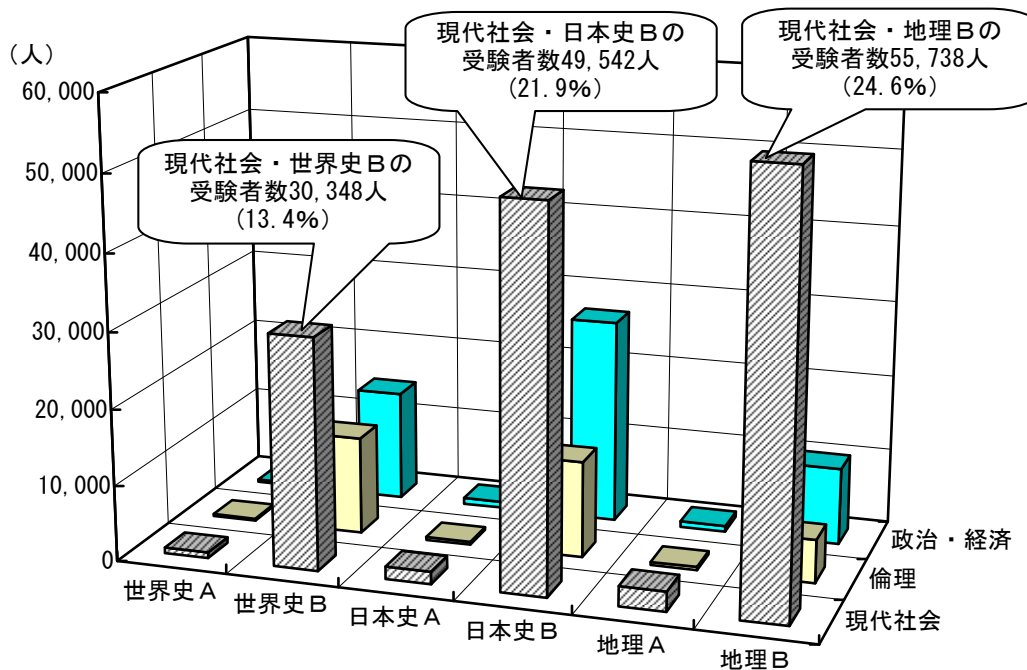
注。「構成率」は、地歴または公民の実受験者数(1科目・2科目受験)に占める、2科目受験者数の割合。



●地歴・公民延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



●地歴・公民の2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



(人)

	現代社会	倫理	政治・経済
世界史A	769	268	316
世界史B	30,348	12,814	14,531
日本史A	1,620	363	809
日本史B	49,542	12,669	26,914
地理A	2,595	408	776
地理B	55,738	5,668	10,103

■理科;理系必須の物理Ⅰ、化学Ⅰの平均点大幅ダウン。生物Ⅰ、地学Ⅰは大幅アップ

◎ 前回の旧課程入試開始の9年以降、理科離れや学力低下、履修科目の不揃いなどから理系を中心に理科2科目化が進み、2科目受験者は17年まで11年を除き毎年増加していた。

特に、16年は5(6)教科7科目化により国立大理系を中心に2科目必須になったことに加え、試験枠が増えて3科目受験が可能になったことなどから、2(3)科目受験者数(実受験者数で、3科目受験者含む。以下、同)は一気に増えて24万人超となり、理科受験者に占める2(3)科目受験者の割合(構成率)も62.6%に達した。

17年は、理科2科目必須とする国公立大(学部)のさらなる増加に加え、総合理科を含む2(3)科目受験の増加により、2(3)科目受験者数は前年より約7,700人(3.2%)増の約24万8,700人の史上最多を記録し、受験者の構成率も67.2%に達した。

◎ 18年はセ試全体の受験者減や時間割の変更による試験枠の分断(17年までは、第1日目の後半に3コマ連続)などの影響で、理科の実受験者数は前年より約1万5,000人(4.1%)少ない約35万5,200人であった。国公立大における理科2科目必須の増加や医学部(医学科)での3科目必須(5大学5学部)もみられたが、理科2(3)科目受験者数は前年より約2万5,900人(10.4%)減の約22万2,800人で、構成率も前年より4.5ポイントダウンの62.7%だった。

19年は、理科全体の実受験者数は前年より若干減り、約35万4,800人だが、各科目の受験者数は増えている。これは、2科目受験者(実受験者)が約2,400人(1.2%)増えたため、全体の延べ受験者数は約1,500人(0.3%)増の約60万7,100人だった。

20年の理科全体の実受験者数は前年より約5,300人、1.5%減少の約34万9,600人だった。科目別では、物理Ⅰを除いて全て減少しており、理科総合A(物理・化学分野)の約5,300人、13.7%減や、理科総合B(生物・地学分野)の約1,700人、8.9%減などが目立つ。

物理Ⅰの受験者数は、前年の平均点大幅ダウンにもかかわらず、前年より約1,000人、0.7%多い約14万2,000人だった。化学Ⅰの受験者数はほぼ前年並みであったが、「物理Ⅰ+化学Ⅰ」の2科目受験者は前年より約1,700人、1.6%増えて約10万4,600人だった。

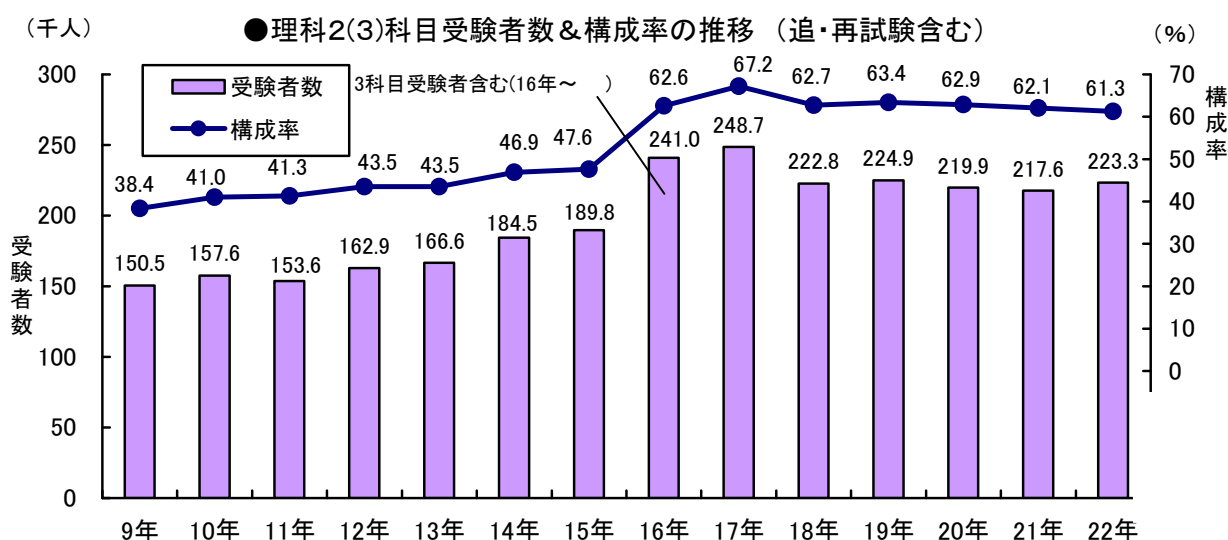
21年は、理科全体の実受験者数が前年より約600人、0.2%の微増で約35万200人であったが、延べ受験者数は物理Ⅰと化学Ⅰを除き、各科目とも軒並み減少し、全体の延べ受験者数は前年より約3,200人、0.5%減の約59万3,900人。因みに1科目受験者(実受験者数。以下、同)は約3,000人(2.3%)増えたが、2科目受験者は約1,000人(0.5%)、3科目受験者は約1,400人(5.1%)それぞれ減った。また、「物理Ⅰ+化学Ⅰ」の2科目受験者(実受験者数)は前年より約2,800人(2.6%)増の約10万7,400人で、2科目受験者における構成率も1.7ポイント上昇の56.1%に達した。平均点は、理科総合Aが8.6点アップ、化学Ⅰが5.3点アップのほか、軒並みダウン。特に、文系志望者の受験率が高い生物Ⅰは、18年の平均点大幅アップ(+18.0点で、平均点69.6点)以降、3年連続ダウンとなった。

◎ 22年は、理科全体の実受験者数が前年より約1万3,900人(4.0%)増え、約36万4,000人となり、各科目受験者合計の延べ受験者数も約1万7,400人(2.9%)増の約61万1,300人に達した。科目別では、生物Ⅰが約8,900人(5.0%)増、化学Ⅰが約8,000人(4.0%)増、物理Ⅰが約3,800人(2.7%)増であったのに対し、地学Ⅰが約1万5,000人(5.7%)減となった。また、2科目受験者では、「物理Ⅰ+化学Ⅰ」(実受験者数)が約5,600人(5.2%)、「生

物 I + 化学 I」(同)が約 2,800 人(5.4%)、「地学 I + 化学 I」(同)が 77 人(12.0%)、それぞれ増えるなど、2 科目受験者(実受験者数)は前年より約 7,900 人(4.1%)増の約 19 万 9,300 人となった。

理科 2 科目の受験者増の背景には、理系志望者の増加に加え、理系に進学した後の専門基礎学力の担保として物理 I、化学 I を中心とした大学側の求めと、それに対する高校側の理系志望者への進学指導などがあるとみられる。ただ、3 科目受験者(同)は前年より約 2,200 人(8.3%)減少し、約 2 万 3,900 人であった。

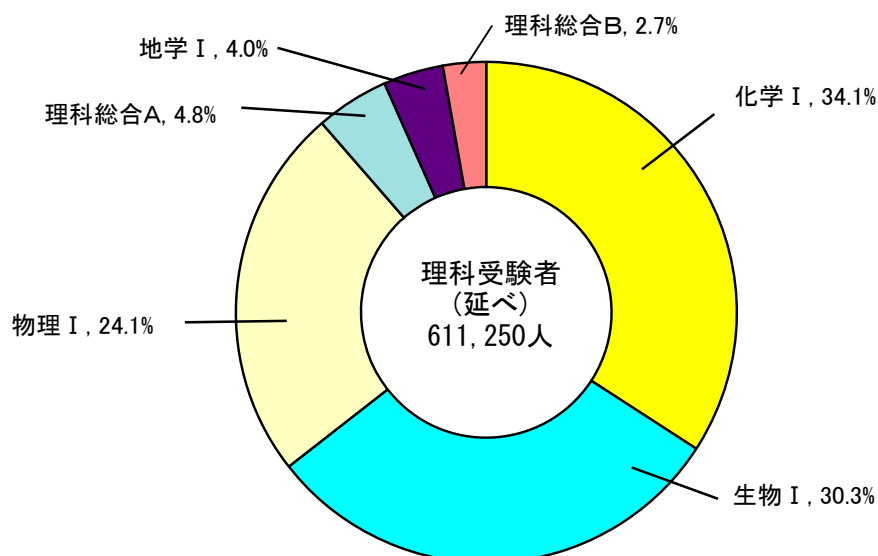
科目別平均点については、理系志望者に必須といえる化学 I が -15.8 点、物理 I が -9.5 点と大幅にダウンしたのに対し、文系志望者の受験が比較的多い生物 I が +13.9 点、地学 I が +14.9 点の大幅アップとなり、理系・文系志望者にとって明暗を分かち結果となった。



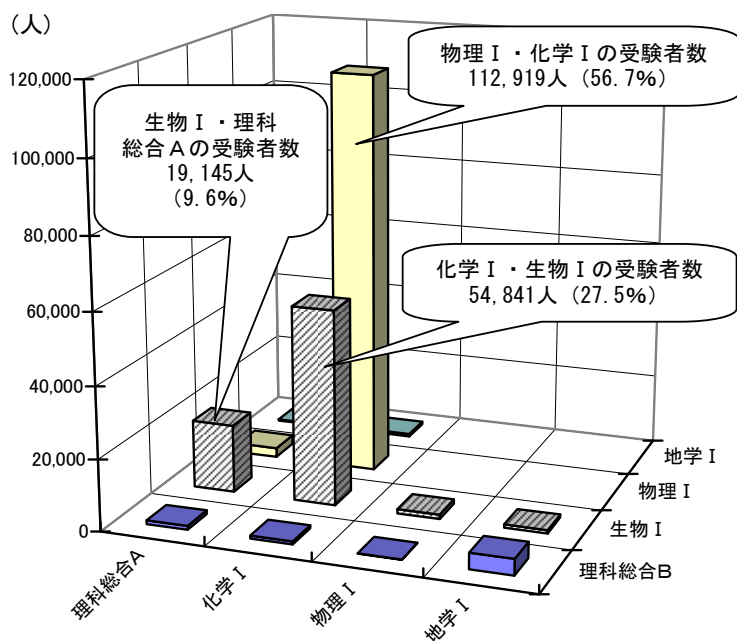
注 1. 16 年以降は理科 3 科目受験も含む(16 年から 3 科目受験が可能)。

注 2. 「構成率」は、理科の実受験者数(1・2・3 科目受験)に占める、2 科目受験者数(3 科目受験も含む)の割合。

●理科延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



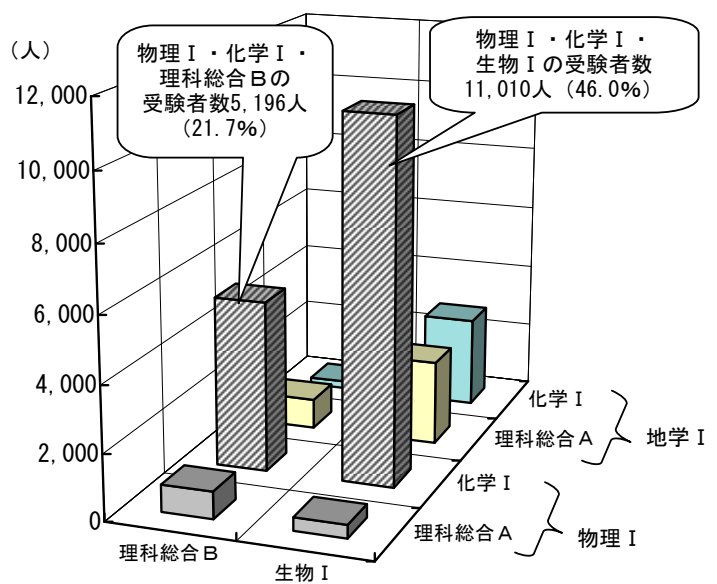
●理科2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



(人)

	理科総合A	化学I	物理I	地学I
理科総合B	1,067	844	93	4,465
生物I	19,145	54,841	1,258	886
物理I	2,684	112,919	—	—
地学I	390	720	—	—

●理科3科目受験者の内訳（追・再試験含む）



(人)

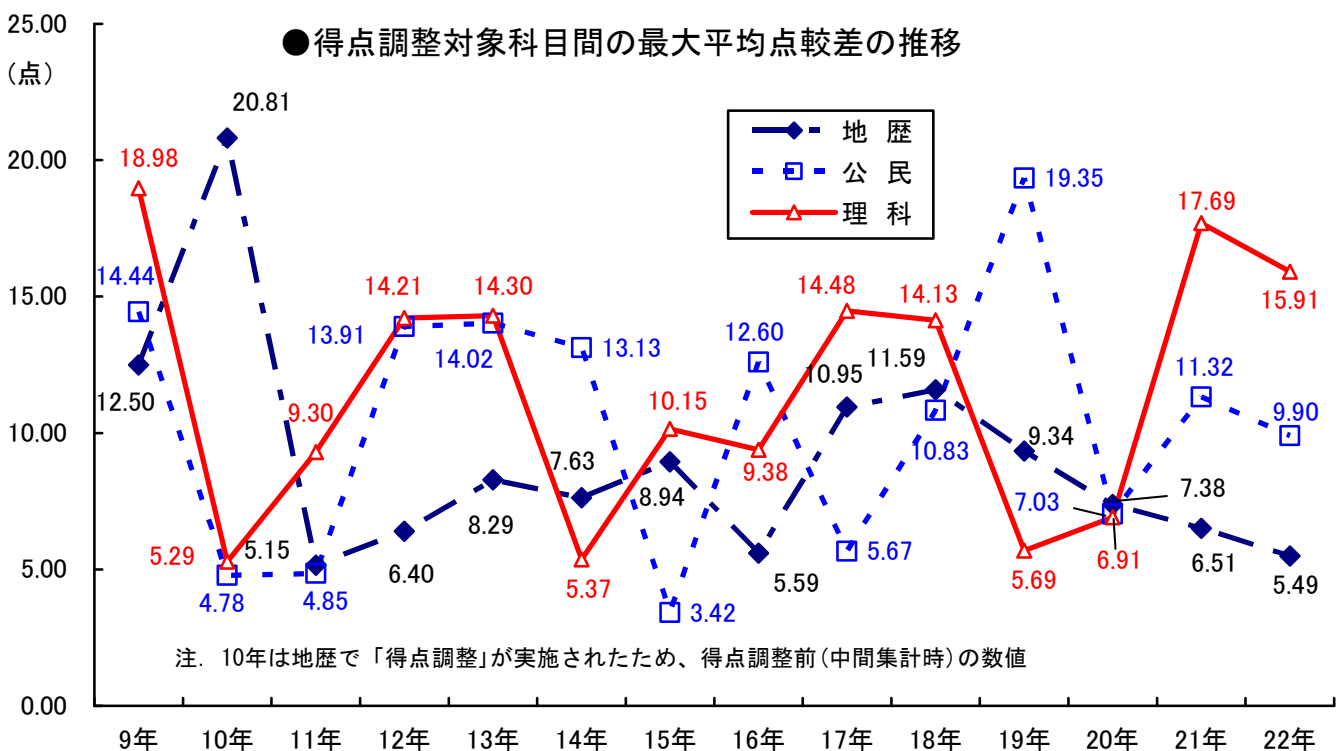
	理科③	物理I		地学I	
	理科②	理科総合A	化学I	理科総合A	化学I
理科①	理科総合B	823	5,196	926	229
	生物I	402	11,010	2,582	2,779

■ **得点調整**; 対象科目間の平均点較差「生物 I - 化学 I」=15.91 点で、調整なし

◎ セ試の選択科目間における大幅な平均点差に対しては、「得点調整」が実施される場合がある。得点調整は、「地歴のB科目間、公民の各科目間、及び理科の各< I 科目 >間で、原則として 20 点以上の平均点差が生じ、これが試験問題の難易差に基づくものと認められる」と、実施される。

◎ 下図は 9 年以降の得点調整対象科目間の最大平均点差の推移を示したものである。

22 年の得点調整対象科目間の平均点差をみると、地歴; 地理 B - 世界史 B = 5.49 点、公民; 倫理 - 現代社会 = 9.90 点、理科: 生物 I - 化学 I = 15.91 点で、最大較差の理科でもガイドラインの 20 点以内に収まり、得点調整は実施されなかった。



<得点調整の実施>

- これまでの得点調整実施の有無をみると、10年は地理 B と日本史 B との平均点差(地理 B > 日本史 B)が 20 点以上(中間集計時点)となったため、世界史 B も加えた地歴 3 科目間で得点調整が実施された。
- グラフにはないが、共通 1 次時代(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)の平成元(1989)年にも理科で実施(物理・生物の得点を修正)された経緯がある。

注) 旧課程入試(9年~17年)の得点調整対象科目は、地歴と理科の B 科目間、及び公民の各科目間。

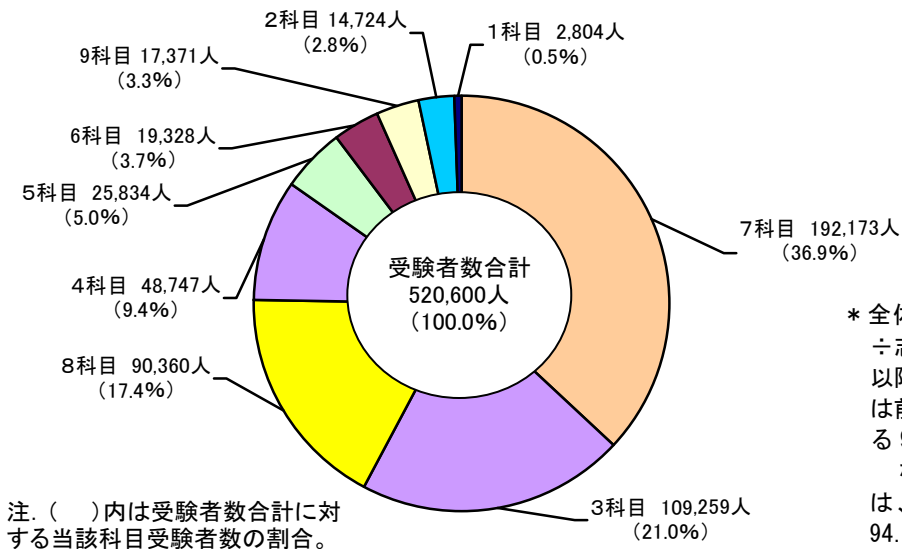
■受験科目数別の受験状況：「国公立大型－7科目」受験が増加

◎ セ試の受験科目数別における受験状況の推移(下図)をみると、16年以降、国公立大の5(6)教科7科目化によって「7～9科目」受験が急増し、高い受験率を示している。

◎ 22年は全体の受験者増の中、4科目～7科目の各受験者が増えた。特に7科目受験者は前年より約1万3,300人(7.4%)増の約19万2,200人で、受験率(当該科目受験者数÷全受験者数×100)も1.7ポイント上昇して36.9%に達した。ここでも、国公立大志望者の増加がうかがえる。

平均受験科目数は、前年より若干増加の5.81科目である。

●22年センター試験／受験科目数別受験者数



* 全体の受験率(全受験者数÷志願者数×100)は19年以降上昇傾向にあり、22年は前年を0.8ポイント上回る94.1%である。
 なお、これまでの最高は、セ試開始時(2年)の94.9%。

注。()内は受験者数合計に対する当該科目受験者数の割合。

●センター試験／受験科目数別受験率の推移

